

『ラブカは静かに弓を持つ』ロングセラー記念ガイドブック

SPECIAL
1

齊藤壮馬さん×安壇美緒さん スペシャル対談



スペシャル
ショート
ストーリー
全文掲載!

SPECIAL
2

あ
だ
み
お
安壇美緒

文芸単行本
好評発売中

ラブカは
静かに
弓を持つ

武器はチェロ。潜入先は音楽教室。
かつてない切なさに心震える
スパイ×音楽小説!



著者撮影／HAL KUZUYA イラスト／よしおか

集英社

ご自由にお持ちください

誰かを救うチェロの音色。

きつと、あなたの
心にも響く――

少年時代、ある事件に遭遇し、
トラウマを抱え生きる橘樹。

勤務先の上司から呼び出され、

音楽教室の違法行為を探るための

潜入調査を命じられる。

橘は身分を偽り、チェロ講師・

浅葉のもとに通い始めるが、

次第に彼の演奏に魅了され……。

安壇美緒

『ラブカは

静かに弓を持つ』

いつき
橘 樹

他人と関わることを
避ける孤獨な青年。

あさば おう たろう
浅葉桜太郎

チェロ講師。陽気で
人当たりが良い。



『ラブカは静かに弓を持つ』ロングセラー記念ガイドブック

次のページから

SPECIAL
1

斉藤壮馬さん×安壇美緒さん
スペシャル対談

10ページから

SPECIAL
2

スペシャルショートストーリー
「音色と素性」全文掲載！²



斉藤壮馬さん×安壇美緒さん スペシャル対談

安壇美緒さんの『ラブカは静かに弓を持つ』は刊行直後から話題、ロングセラーとなっています。そこで今回、以前、推薦文を寄せてくださった声優歌手の斉藤壮馬さんとの対談が実現。斉藤さんは文芸誌で初の短編小説を発表したばかり。お二人に本作のこと、創作について存分に語っていただきました。

斉藤

僕はふだん、登場人物に自分を重ねることはあまりないのですが、『ラブカ』の主人公の橘と、彼がチェロを教わる浅葉先生との関係を読みながら、僕自身を見抜かれているような心地がしました。キャラクター造形も物語運び

も非常に魅力的で、結末を知ったうえであらためて読み直しても、一気に惹きこまれてしまいました。音楽の著作権をめぐるスパイ小説、という設定がそもそもおもしろいですし。

安壇

実際に、音楽教室での演奏に対して著作権料を徴収できるのか、という趣旨の裁判で、橘のように著作権を管理する団体の職員が覆面調査した事実を証言したことがありましたよね。それを小説にしてみたらどうか、と担当編集者から提案されたのですが、私自身は音楽に明るくなくて。実際に音楽教室の体験レッスンに行ってみたり、資料を読み込んだりしながら書きあげたので、そう言っていただけ



斉藤壮馬さん×安壇美緒さんスペシャル対談

THE FRILLED SHARK HOLDS A BOW QUIETLY / ADAN MIO

るとホッとします。

齊藤 橘という生徒と、先生である浅葉のやりとりが印象に残りました。浅葉先生が「的確なイマジネーションこそが、音楽に命を与える」と言う場面。十年ぶりにチェロを弾いた橘の中にイマジネーションが確かにあることを見抜いたうえで、それを聴く人に届ける意識をもたせるようなアドバイスする姿が、僕がこれまで、声優や歌手の仕事を通じて感じてきたことと繋がりました。

安壇 浅葉、という名前を登場させた時点では、彼がどういう人物なのか何一つ考えていなかったのですが、実際に橘と出会い、レッスンを重ねていくうちに、思った以上に奥行きのあるキャラクターに育ってくれました。

齊藤 そうだったんですね。浅葉先生は社交的でオープンなわりに、どこことなく掴みきれず、相

ですが、楽曲の方向性を「これは晴れているけれど雨が降っている庭先の曲です」というような形でお伝えしたりします。あるいは「静止画というよりは、物事が進んでいる最中を表現しています」とか。ただ、声優のお仕事は、あらかじめ作品とキャラクターが存在しているので、あまり強くイメージをもたないほうがいい場合もあって。本当は、無色透明の水みたいなイメージでやりたいんですが、僕を介してセリフを発する以上、どうしたって色はついてしまう。現場によっては濃味つけを求められることもありますね。それでも、結果的にどんな色が足されるとしても、ベースの自分ではできるだけ透明でいたいと思っています。

安壇 それは、最初から我を出すことをせず、まわりとの調和を考える、ということでしょうか。

齊藤 そうですね。ただ、調和を最優先に考え

手の小さな嘘をすぐ見抜く鋭さもある。自分にとつての先輩声優の木村良平さんという方に似ているなあ、と思いながら読んでいました。嘘や隠しごとをしているわけではないけれど、僕はどちらかという橘に似ていて、明確に誰と話していても、パフォーマンズをしているときも、無意識にフィルターをかけてしまっているような感覚が消えない。浅葉先生から橘へのアドバイスは、僕に向けられてもいるようで共感しましたし、木村さんと二人で朗読したらおもしろいだろうな、とも想像しながら拝読しました。

安壇 作中で橘が『泉の絵』を思い浮かべながら、ある曲を演奏しているというエピソードは、私自身が小説を書くときにいつも、一枚絵の情景を思い浮かべているのをとり入れたのですが、齊藤さんにもそういうことはありますか？

齊藤 ありますね。僕は作詞と作曲をするの

すぎるあまり、お芝居が成立しなくなるということもある、と先ほどお話しした木村さんに教えていただいたことがあって。バランスをとるために芝居をするのではなく、なぜバランスをとる必要があるのか、なぜそのキャラクターはバランスをとりたがっているかを考えたほうがいい、と今は考えています。その感覚は、浅葉先生が橘に教えた譜読みの仕方と近いものがある気がします。そんなふうに、非常に感覚が重なることの多い小説でした。

安壇 よかった。弓の持ち方など、技術面は資料から学ぶこともできますが、演奏に向かう心持は想像するしかなく、書いているあいだずっと不安だったんですよ。でも今、一つの裏付けをいただけたようで、大変、嬉しいです。

齊藤 着想はもちろん、細部の描写からも、クラシックがもともと好きで、なおかつ丁寧に





取材された結果の作品なのだと思うので、それほど詳しくないところがつて、かなり衝撃を受けました。

安壇 だいたいの人が「あ、これ知ってる」と思うような曲を知っていて、なんとなく好きなものもある、という程度で、作曲はもちろん演奏すらしません(笑)。著作権についても、初めて知ることばかりでした。裁判が報道されたとき、音楽教室のレッスンで著作権料をとらなく

れて、シンブルにわくわくさせられてしまいました。『羊たちの沈黙』の原作小説を参考にされたとおっしゃっていましたが、僕の好きな香港ノワール映画にも近い雰囲気を感じました。たとえば、橋が長いあいだチェロをやめていたのには理由があつて、それゆえに通っている心療内科の先生が登場するじゃないですか。物語には一見関係なさそうなキャラクターが実は重要な役割を発揮する、という展開がもつたまららないですよ。

安壇 あの先生も、浅葉同様 最初は何も考えていなくて(笑)。前半を書き終えたころ、担当編集者さんから「登場させなくてもいいんじゃないか」と言われたくらいなんです。だけど、理由はわからないけど残しておくか、と書き続けていたら、意外な活躍を見せてくれた。序盤になんとかなく登場した人を残しておく、

ても、という意見が多かったですし、私自身もそう思うところもあったのですが、調べていくうちにだんだん、橋たち団体側にも言い分があり、必要だからシステムは構築されているのだということもわかってきた。あくまでエンターテインメントとして書いた小説なので、社会問題として強く提示するつもりはありませんでしたが、橋は橋でプライドをかけて任務を遂行しているのだ、ということはしっかり書いてあげたくなった。浅葉先生や他の生徒たちと仲良くなり、板挟みになればなるほど、そのプライドにすぎないかなくなっていく彼の苦しさも。

斉藤 僕自身はどちらかというと、団体の側にも立つ人間なので、その心情含め、より興味深く感じるものがあつたと思います。ただ、最初に申し上げたとおり、キャラクター配置と構成があまりに巧みで、現実での自分の立ち位置は忘

案外、いいことがあるんですよ(笑)。

斉藤 参考になります……！ いかなる創作物も、理性でコントロールしきれない無意識領域にアクセスしてこそ飛躍すると思うんですよ。僕が想像していた以上に、安壇さんは執筆中のグルーヴ感を大事にされていると知つて、だからこれほどおもしろい小説が書けるのかと、納得しました。

安壇 斉藤さんも雑誌「スピン」に短編「いさな」を掲載されましたよね(※)。読みながら、主人公が目にする実家のまわりや海の情景が自然と浮かんできましたし、読み終えたあとにも余韻とともによみがえってくるものがありました。(実家は山肌の傾斜地に立ち、目の前を川が流れている)から始まる描写がとくに好きで、初めての作品とは思えないほど、小説としての完成度が高いので驚きました。





(※)河出書房新社の文芸誌「スビ」(2022年9月27日発売)にて斉藤さんが自身初の短編小説を発表。悩みを抱え実家に帰省した男と、声が出せない少女との出会いを描く、不思議な夏の物語。

でしたときは、いい文章ってどういうものだろう
と思ひ悩んでもいた時期で。聞こえのいい音色
で本人の気持ちいいテンポでしゃべっているから
といって、聞いた人の心を動かす芝居にはならな
いというのと同じで、演奏も文章も、創作の根
源には率直に自分と向き合う心が必要なのだ

安壇 同じ雑誌に掲載されていたエッセイでも
海について書かれていましたが、もともと大好き
なんですか。

斉藤 実はそうでもなくて(笑)。和歌山では、
台風後は海に行つてはいけないと言われている
んですが、

斉藤 もともと趣味で小説は書いていたんで
すが、この小説は、長いことうまく書けずにいた
ものなんです。海に迷い込んでたくじらと、
その背に乗って大海原にでいく少女という情
景のイメージだけではずっと抱いていたんですが、
同じタイトルの歌だけが先にできあがっていて。
小説のご依頼をいただいたのをきっかけに、よ
うやく完成させることができました。母の地元
である和歌山の海をモデルに、僕が子どもの頃
本当に迷い込んできたことのあるくじらのエビ
ソードなど、断片的な記憶を盛り込みながら書
いたのも、よかったのかもしれない。

んですが、妹と行つてみたら全身をイトクラゲ
に刺され、本気で死ぬ思いをしたことがあった
んですよね。それなのに父には気合が足りない
からだと言われ……以来、どちらかというと好
きではないんですが、言われてみれば確かに、海
や水をモチーフとして使う傾向があります。海
のない山梨県で育ったので、無意識に憧れてい
るのかな。

安壇 自然の情景のなかで、男と少女が淡々
と会話していただけたのに、登場人物にも物
語にも奥行きがあつて、この短さのなかにアル
コール依存症というテーマも盛り込んでいる。実
はものすごく難しいことに取り組まれているの
に、それを感じさせない心地よい読み応えがあ
りました。斉藤さんの小説、もっと読んでみたい
です。

斉藤 ありがとうございます。「ラブカ」を読ん

なとあらためて思いました。これは安壇さんの
前作『金木犀とメテオラ』にも、作風の違いはあ
れど、通ずるものを感じます。実をいうと、声
優よりも先になりたいと思った職業が小説家
なので、声優の道を歩んできた今、機会をいた
だけたのは御褒美のようなものだかと捉えて
いて。芝居と音楽、文学が融合したような表現
を、自分なりに探つていきたいと考えています。
本日はとても素敵な時間をありがとうございました。

安壇 楽しみにしています。私も今日、斉藤さ
んのお話にとっても励まされました。これから
ジャンルを固定せず、自分が書きたいと思つた
のを、あるべき姿に持つていけるよう、肅々と向
き合つていけたらと思います。今日は本当に、あ
りがとつございました。

(文構成 立花もも)



音色と素性

安壇 美緒

ミカサ音楽教室の先生って仕事を、俺、浅葉桜太郎は結構気に入っている。

小さなスタジオの中で椅子に座って待っているだけで、俺にチェロを教わりたい、という生徒が次々にやって来てくれるのだから。

最近、レッスンに通い始めた橘君^{たち}という二個下の奴は、ちょっと変わっていて面白い。

「タッタタラッタラッタラーのところ、ちょっとリズムがもたついているな。少しテンポ落としていいから、そこ丁寧に弾いてみて。とはいえ、意識は弓から逸らさずに」

チェロはとにかく弓だから、と俺がいつもの台詞を口にする、目の前でチェロを弾いていた男が、はい、と生真面目に返事をした。相変わらず、絵画から抜け出てきたかのような、謎に整った容貌をしている。そこから辺によくいる感じのイケメンではなく、場に違和感を覚えるようなレベルだ。でも仕事は芸能関係とかではないらしく、聞けば公務員だと言う。

橘君は、俺の生徒の中では抜群に弾ける奴だった。中学以来、まったく弾いていなかったらしいのに、しつかりと基礎が身に付いている。それは本人の資質ゆえでもあるのだろうし、かつての師匠の教え方が良かったというのもあるのだろう。

最初の体験レッスンで弾いてもらった段階で、いいな、と思つたのをよく覚えてる。

「あれだな、一曲を丁寧に仕上げていく方向性に変えて良かったね。レッスンの時に余裕が出るでしょ。自宅にチェロ借りてく」と

「そうですね。自分で練習してからここに来られるとやっぱり違うので……」

橘君がこの教室のチェロをレンタルし始めたのは、ついこの間のことだ。それまでは仕事が忙しすぎて、週末に自主練をする時間すら取れなかったらしい。少し前、このスタジオでぶつ倒れた時は本人よりも俺がビビった。よく言えば真面目なのだが、悪く言えば要領がよくはなさそう、もしかしたら職場でも体よく使われまくっているのかもしれない。

ぱつと見、なんでもそつなくこなせそうな雰囲気なのに、人は見かけに寄らない。

「家の近くのカラオケまでチェロ背負って行つてんだっけ？ 自主練の時」

「……なんか、毎回でかい部屋にわざわざ通されるのでちょっと恥ずかしいんですけどね」
楽器がでかいからですかね、と橘君が微妙そうに首を傾げる。別に部屋なんてでかいほうがいいだろうよ、と思うのだが、何をそんなに気にしているのか俺にはよくわからない。

でも、この過剰なまでの繊細さが、こいつの奏でる音楽を豊かにしているような気がする。

「よし、じゃあもう一回。頭から」

俺が脚を組み直してそう言う、橘君が弓を構えて、チェロの腹部に視線を落とした。

ポップスが弾いてみたいです、と最初に橘君は言っていた。

子どもの頃に師事していた先生は、ドツツァウアーやリーなんかのチェロ練習曲以外を弾くことを許してくれなかったらしい。たぶん当時から、この子は見込みがあると思われていたのだろう。もしかした

ら、優秀なチェリストに育ててやるつもりだったのかも知れない。

いまからでは叶わないのだろうか、俺にはその先生の気持ちがよくわかる。

「うん、さつきより良くなった。でもまだちょっと左手の運指が苦しそうだ」

弓使いはもつと軽く、と俺が指摘すると、橘君がみずからの指先をじつと見つめた。その瞳はあまりに真剣で、いわゆる趣味、の範疇に収まるものではないようにも思える。

本来、音楽というものは、ただ楽しむためにあるものだ。趣味でもなんでも、そいつの人生が少しでも豊かになるのなら、俺はそれでいいと思っている。

それなのに、磨かれるタイミングを逃した才能を惜しんでしまうのはどうしてだろう。

「一回、俺が弾いてみるかな。テンポ落としてやってみるから、リズム、耳で覚えて」

床に寝かせてあった自分のチェロを起こして、ボディを膝の間に挟み、上部のネックの部分を左胸に軽く当てると、それだけでどこか気持ちさが落ち着いた。

ぴんと張った弓を構えて、軽くお手本を見せてやる。

俺がチェロを始めたのは、十一歳の時だった。身体の奥深くまで響きが落ちてくるような感覚は、それまでやっていたピアノでは得られなかったものだった。音域が広いチェロは、ヴァイオリンのように高らかな音を奏でることも、コントラバスのように重厚な音を奏でることも出来る。人の声に一番近いと言われている楽器が、チェロだ。

弦の震えは、弾いている者の身体をも同時に戦慄^{わな}させる。弓を動かしている間、ひよつとしたら俺の身体から音楽が生まれているんじゃないか、という錯覚すら覚えてしまう。

音色も、ボディも、完璧という言葉がふさわしいまでに美しい弦楽器。

歓びのうちにある時も、苦しみの中にある時も、俺はずっとチェロを弾いてきた。

「まあ、こんな感じで。原曲のリズムカルなイメージが強いかもしれないけど、これくらいテンポ下げちゃっても、また違った味わいがあるといいだろ。左手の運びがゆっくりになると、そっちを意識しないでもよくなるし」

なので、肝心の響きのほうをきれいにしていきましょう、と俺が弓を下ろすと、眼力の強い目が、それを一瞬、追いかけた。

すごいわけだ。この集中力が。

「……俺、中高生の頃とかに、ちゃんと弓の動きを見ろ！　ってよく先生に叱られたんだけど」

「そうなんですか？」

「こつちとしてはかなり気合い入れて先生の弾き方を盗んでいるつもりだったからさ、何言っただよって当時は思ってたんだけど。橘君を見てたらなんか納得しちゃうな」

それってどういう意味ですか？　と橘君がおそろおそろ訊いてきたので、いや褒めてんの、と笑ってしまった。見た目の話ばかりするのもあれだけど、こいつ上背だってあるのに、なんでこんなに自信がなさそうなんだろう。公務員ってことは仕事も安定しているんだろうし、中学までチェロを習ってたくらいだから実家に余裕もあるだろう。むしろ、このスペックだったら、ちょっとくらい調子に乗っていても腹は立たない。

チェロを弾いている姿以外がまったく想像がつかない奴なんだよな。何故か。

「音楽っていうのはとにかく師匠の模倣から入るもんだから。その齟齬^{そご}り付いてくるようなレッスン態度は大したもんだよ。で、話は戻るんだけどさ、週末は自主練やってんだよね？」

「やってますよ、ちゃんと」

「橘君ってさ、逆にそれ以外の時って何やってんの？」

たまには友達と酒飲んでバーベキューみたいなこともやったりしてんの、と試しに話題を振ってみたら、あからさまに嫌そうな表情を浮かべられてしまった。

その顔、俺が滑ったみたいだからやめてほしい。

「……そんなに引くような話じゃねえだろ。河原でワイワイバーベキュー」

「いや、本当に何もしてないんですよ。洗濯とか回してるうちに一日終わるんで……」

さすがにそんなに服の数もねえだろ、と突っ込もうかと思っただけで、時間がもったいないからやめた。基本的に、スタジオでの雑談は長引かせてはいけない。

レッスンの時間は、たった四十五分間しかないのだから。

「じゃあ、さっきのテンポでもう一回。そろそろ時間だから、ラストまで丁寧」

俺がそう切り替えると、橘君も姿勢を正した。

最初の音が聴こえてきた瞬間、さっきよりもよくなるな、と俺はなんとなく予感した。

「リズムの詰まりが解消されて、随分聴きやすくなった。このテンポでしばらくやろう。情熱的な曲だから、そういうのも意識して。またしっかり練習してきてよ」

週末はバーベキューよりもチェロだよな、とつい俺がにやけてしまうと、何笑ってたんだよ、とでも言いたげな顔をしながら、橘君が楽譜を鞆にしまい込んだ。いつも譜面台に置かれているステンレスのボールペンも、胸ポケットに突っ込まれる。

レッスンの時間というのは不思議で、本当に、あつという間に過ぎてしまう。

「自分でフォロイー入れるのもなんだけど、別にからかってないからね？」

「何も言っていないですよ」

橘君って普段何やってんのかな？ってちょっと思っただけだから、と俺が首の後ろをカリカリと搔くと、だから何もしてないんですよ、と半笑いが返ってきた。

人間らしい雑味に欠けた、白シャツにスラックス姿の長身の男が、俯き加減にこう呟く。

「浅葉先生には想像もつかないかもしれないですけど、本当に何もしないで生きてる奴ってというのが世の中にはいるんですよ。でも、ここに通い始めてちよつとマシになりました」

じゃあ来週、と軽く会釈して、橘君がスタジオのドアを押し開ける。

何かが足りないような印象を受けるのは、その背にチェロがないからだ。上級クラスのほかの生徒たちは、みんな自分のチェロを持っている。通勤経路の関係で、橘君はチェロを持ち歩けないらしい。子どもの頃に弾いていたチェロはもう手元がない、とも。

音楽は、それを奏でる者の奥深いところで眠っている本質のようなものを、ゆっくりとサルベージする。見た目も、経歴も、普段何をしているのかも、まったくもって重要じゃない。

おまえがどこで何をしている奴だろうとも、俺はここでチェロを教えてやるだけさ。

深く潜れば潜るほど、主人公と自分を重ね、浅葉先生に救われ、突き刺される。
暗い深海で一筋の光にすがるように、どうか
壊れてしまわないでと願いながら、一気に読み終えました。

——斉藤壮馬さん

ラブカは静かに 弓を持つ

安壇美緒

ロングセラー
5刷!!

好評発売中 文芸単行本●定価1,760円



▶ 試し読み、篠田節子さんとの対談、
著者×担当編集者×書店員座談会はこちら!



〈安壇美緒の好評既刊〉



金木犀とメテオラ

集英社文庫●定価792円

東京生まれの秀才・佳乃と、完璧な笑顔を持つ美少女・叶。北海道の
中高一貫の女子校を舞台に、思春期の焦燥と成長を描く、青春長編。



天龍院亜希子の日記

集英社文庫●定価594円 〈第30回小説すばる新人賞受賞作〉

ブラックな会社に勤める譲は、激務に疲れて惰性で生きる日々。ひょんなことから、元同級生のブログを見つけたが…。希望へ向かう物語。

●表示価格は消費税10%を含んだ定価です。 **集英社**